

ヴァンデルのカルヴァン研究

— 伝 記 篇 —

森 川 甫

フランソワ・ヴァンデルの博士論文『カルヴァン。彼の宗教思想の源泉と発展』¹⁾は、ジャン・カルヴァンに関する過去の研究書を吟味、評価し、カルヴァンの生涯と宗教思想を論及する画期的な研究書であるとされている。パリ・ソルボンヌ大学高等研究院教授のリシャール・ストーフェール氏も、ニーゼルの『カルヴァンの神学』²⁾とヴァンデルの本書、2冊を今後のカルヴァン研究の出発点としてあげられていた。前者には邦訳があるが、後者にはまだないので、その紹介をしたいと思う。

本書は2部から成り、第1部は伝記を扱い、第1章、修業時代、第2章、第1次から第2次ジュネーヴ時代、第3章、ジュネーヴ教会建設と正統性のための戦い。第2部は神学的教理を取り上げ、第1章、『基督教綱要』、第2章、世界の創造者、かつ、最高の統治者である神、第3章、イエス・キリスト、贖罪者としての神、第4章、聖霊のひそやかなる働き、第5章、外的手段、の如く成り立っているが、本論では都合上、伝記を扱う第1部(75頁)のみを取り上げることにする。

* * *

「はしがき」においてヴァンデルは、20世紀に入ってからカルヴァン研究に触れて、批評、評価をしたのち、本書の目的を述べている。すなわち、カルヴァン全集の記念碑的な版が今世紀初頭に完成して以来、このフランス人宗教改革者の人

物と業績に関してはあらゆる面で研究が増加した。カルヴァンの生誕400周年には、彼の思想を全体的に把握したり、あるいは伝記のある部分を再構成することを目的とする研究が数多く現われた。これらの研究は一般に簡潔で要約的なものであったが、エミール・ドゥーメルグの著書、『ジャン・カルヴァン。彼の時代の人々と状況』³⁾は7冊の大著である。「その膨大さだけでなく、カルヴァンの生涯の最も小さな詳細を明らかにするために著者が払った配慮によって、ドゥーメルグの著作はその聖者伝的、弁護論的傾向に疑念をいだく人々、あるいは、カルヴァンの教理を余りにもしばしば曲めて解釈する、その神学的偏見を認めるのをちゅうちょする人々にとってさえ、今日でもなお、情報の宝庫である。」⁴⁾とヴァンデルは幾分か留保を示しつつも、ドゥーメルグを高く評価している。また、ヴァンデルは「カルヴァンの『綱要』は20世紀には19世紀よりも読まれまいであろう」と予想したパウル・ヴェルンレ Paul Wernle を批判して、事実は全く逆となり、17世紀以来、カルヴァンの文書は今日ほど多くの読者を持ちえたことがないと指摘している。カルヴァンの宗教思想とか、牧会活動のある面を明確にする意図で無数の小論文が発表されてきた。もちろん、その価値はさまざまで、カルヴァン自身が読んだら、これが自分の思想かといふかのようなものも多数あるのは確かであろう。しかし、他方、真に学問的

1) François WENDEL, *Calvin, sources et évolution de sa pensée religieuse*, 1950, P.U.F., 292 p. 以下、略号 Wを用いる。

2) Wilhelm NIESEL, *Die Theologie Calvins*, 1938, Chr. Kaiser Verlag, 改訂版の邦訳、渡辺信夫訳『カルヴァンの神学』新教出版社、1960年。

3) Émile DOUMERGUE, *Jean CALVIN, les hommes et les choses de son temps*, Lausanne, 1899—1917 et Neuilly, 1926—1927.

4) W., p. V.

に研究し、この宗教改革者のかって知られざる面を明らかにしているものもあると著者は述べている⁵⁾。

本書の目的についてヴァンデルは次の如く述べている。センセーショナルな新しさや未発表の解釈を試みるものではなく、フランス語による文献の示しているかなり重大な欠陥を補うところにある。ドゥーメルグの著作を除くと、カルヴァンの教理の全体を捉えているものがない。ドゥーメルグの著作も今日、書店の店頭で入手し得ないし、また、内容も時代遅れの観があるので、テキストの厳密な考証と最近の研究の成果を踏まえた新しい歴史的研究が必要であると思われる。本書はカルヴァンの宗教思想を示そうとするものであるが、問題や論争の詳細にまで立ち入って、完全に、徹底的に明らかにしようとするものではなく、カルヴァンの教理の主要点を適確、簡潔に概観するところにある。カルヴィニズムの独創性を決定する点にアクセントをおくが、カルヴァンが古代教会の教父たちや宗教改革者たちの思想の影響を受けた点も無視しないし、彼らによってカルヴァンの思想の起源の問題にも触れる。カルヴァンの知的形成がどのようなものであったか、読書によって如何なる精神的傾向と結びついていったかを明確にするよう努めることにより、カルヴァンの思想の基盤と彼の周辺をよりよく理解したい。しかし、カルヴァンと教父、先輩の宗教改革者との関係は、カルヴァンが彼らの思想を忠実に守り、それを再現していく弟子というようなものではない。カルヴァンはその処女作においてさえ示している少々、高慢な独立心をルター、ブツァー、アウグスチヌスのような、彼が多く学んでいる人々に対してさえ持っていた。カルヴァンの思想とこれらの人々の教えとの関係を明らかにすることはできるが、カルヴァンは学んだものを彼自身が別の色調をほどこし、別の精神的風土に変えてい

る。そして、彼が極めて個性的に解釈することをためらわなかった聖書も含めて、著述、注解したすべての文書の中に彼自身の独自性があることを示したいと思う⁶⁾。

また、第1部において伝記を取り上げる点に関して、ヴァンデルはその理由を明確にしている。ルターの伝記的所与が彼の思想と分離できないのと同様、カルヴァンの生涯を刻む重要事件を除くと、彼の思想は正確には説明できない。彼の受けた教育、ジュネーヴ、ストラスブールでの経験、論争が彼の思想の発展に深い刻印を押している⁷⁾。それ故、第1部では略伝を扱うことになる。この研究は出来る限り厳密な歴史的方法によるよう努力する。イデオロギッシュな偏見を排して、カルヴァンの原典と歴史的環境の中で彼の思想を示すことにしたい⁸⁾。以上の如く、ヴァンデルは述べている。

第1章 カルヴァンの青年時代

I. 修業時代

II. 『セネカの「寛容論」注釈』とカルヴァンのユマニスム

III. 回心

カルヴァンの生涯に関する研究はルターのそれほど多くはないが、それでも過去半世紀のあいだ、かなりの数にのぼっている。彼の生涯は正確な資料が不足しているため、知られていなかったり、誤解されてきたことは事実である。ある種の臆病さ、公の生活からかくれようとする貴族趣味の故に、カルヴァンは生来、彼自身の打ち明け話をしない。また、彼個人は無であり、神の意志の道具として用いられてのみ役立つという確信から、伝記にとって興味ある多くの出来事について語ろうとはしなかった。とりわけ、幼少時代の資料は少ない。しかし、注意深く研究されてきた⁹⁾。

5) Cf. *W.*, p. V.

6) Cf. *W.*, pp. V-VI.

7) Cf. *W.*, p. VII.

8) Cf. *W.*, p. VII

9) ドゥーメルグの前掲書以外に、価値ある文献としてヴァンデルは次のものを挙げている。F. W. KAMPSCHULTE, *Johann Calvin seine Kirche und sein Staat in Genf*, 2 vol., Leipzig, 1869—1899; W. WALKER, *John Calvin. The Organiser of Reformed Protestantism*, New York, 1906; Aug. LANG, *Johannes Calvin*, Leipzig, 1909; R. N. CAREW HUNT, *Calvin*, London, 1933; P. Imbart de LA TOUR, *Calvin et l'Institution chrétienne*, Paris, 1935; J.-D. BENOIT, *Jean Calvin, la vie, l'homme, la pensée*,

I. 修業時代

ジャン・カルヴァンは父、ジェラルール Gérard, 母、ジャンヌ・ルフラン Jeanne Lefranc との間に、1509年7月10日、ノワイヨン Noyon で生れた。ノワイヨンの初級学級で学んだのち、14才のときモンモール家 les Montmor の年長の息子たちと共にパリへ遊学する。カルヴァンが最初に入った学校はラ・マルシュ学寮 Collège de la Marche で、ここでは近代教育学の創始者の1人、マチュラン・コルディエ Mathurin Cordier の指導を受ける。翌年、反動のカトリックの牙城であるモンテーギュ学寮 Collège de Montaigu へ移る。学寮長はルター派の「異端」やユマニスト的方法に対する闘争を指導するベディエ Bédier であった。この時期、カルヴァンはモンモール家の息子たちや、彼の従兄弟オリヴェタン Olivétan との友情を深めている。オリヴェタンはすでに宗教改革に同調し、また、ユマニズムに強い関心をいっていた。

カルヴァンの父は初め、息子ジャンを司祭にしようとして神学を学ばせるが、1528年または、1529年に、ジャンは初めの志望を放棄して、地方大学へ移った。まず最初、法学を学ぶためオルレアン大学へ行く。当時、オルレアン大学にはすぐれた教授たちがいた。その中にはヨーロッパで最もすぐれているとの評判であったフランス人法学者ピエール・ド・レトワール Pierre de l'Etoile がいた。レトワールは伝統的信仰を保持し、保守主義者として知られていたが、ユマニストの活動には好意的で、その成果を彼の法学研究に利用していた。カルヴァンはレトワールに深い感銘を受け、

のちにブルージュの大学で高名なイタリア人ラテン法学者、アルツィアート Alciat に学んだのちもレトワールを尊敬している¹⁰⁾。ヴァンデルは「レトワールがプロテスタントに対敵態度をとっていたにもかかわらず、カルヴァンの法観念自体はレトワールの教えに常に固く依拠している。」¹¹⁾と指摘している。

カルヴァンはこのように法学研究をすすめると共に、古典研究も始め、ルターに傾倒したメルヒオール・ヴォルマル Melchior Wormar からギリシャ語を学んだ。ヴォルマルがカルヴァンを改心させようと試みたであろうとの推測は大いに可能性があるが、カルヴァンの著書には宗教的な面におけるヴォルマルの影響を示唆するようなことは一行も書き残されていない。カルヴァンと同時代人である、カトリックの歴史家フロリモン・レエモン Florimond Raemond は「ヴォルマルがカルヴァンの回心において決定的役割を果たした」¹²⁾と述べているが、ヴァンデルは逆に、「カルヴァンはこの時期、その宗教的態度を目立つほど変えはしなかった。反対に彼はますます、ユマニズムの世界へ入っていった。当時、彼が結んだ友情はユマニズムとの結びつきの強さを示している。」¹³⁾と述べ、フランソワ・ダニエル François Daniel フランソワ・ド・コナン François de Connan また、特に、ニコラ・デュシュマン Nicolas Duchemin との友情をあげ、この3人ともローマ教会に忠実であったと言っている。

マルグリット・ド・ナヴァール王妃はそれまで振わなかったブルージュ大学に、オルレアン大学からヴォルマルを招き、さらに、当時ヨーロッパ第一のラテン法学者とみなされていたアルツィアートを招く。カルヴァンはアルツィアートから

2^e édit., 1948 et Calvin, directeur d'âmes, Strasbourg, 1947; A. LEFRANC, *La Jeunesse de Calvin*, Paris, 1888; J. PANNIER, *Recherches sur l'évolution religieuse de Calvin jusqu'à sa conversion*, Strasbourg, 1924 et *Recherches sur la formation intellectuelle de Calvin*, Paris, 1931; Quirinus BREEN, *John CALVIN: a study in French Humanism*, Grand Rapids, Mich., 1931; Marg MANN, *Erasmus et les débuts de la Réforme française*, Paris, 1934; A. MITCHELL HUNTER, *The education of Calvin (The Evangelical Quarterly, 1937)*.

10) Cf. W., p. 8; J. BOUSSARD, *L'Université d'Orléans au XVI^e siècle (Humanisme et Renaissance, t. V. 1938)*; K. MULLER, *Calvins Bekehrung*; G. BEYERHAUS, *Studien zur Staatsanschauung Calvins*.

11) W., p. 9.

12) Florimond de RAEMOND, *Histoire de la naissance, progrès et décadence de l'hérésie de ce siècle*, Rouen, 1623, p. 882; cf. W., p. 9.

13) W., p. 9.

ラテン法を学ぶが、その内容に失望し、加えて、アルツィアートがカルヴァンの師、レトワールを批判したことから、カルヴァンはアルツィアートを嫌った。カルヴァンがこのイタリア・ユマニズムの代表者アルツィアートから学んだものは、正確で調和のとれたラテン語である¹⁴⁾。

カルヴァンは父が突然、病気で倒れたため、ブルジュを離れ、故郷ノワイヨンへ赴き、父の臨終にあう。父、ジェラルドは死の2年以上前から、ノワイヨンの司教と不和になり、教会から破門を宣告されていた。破門の解除を求めて交渉するが、遂に決裂する。この決裂はカルヴァンをローマ教会から離れるようおいやったか、少なくとも、最終的決裂への道を備えることとなったとヴァンデルは言う。この章「修業時代」に関してヴァンデルはルフランをしばしば参照しているが、この事件については、ルフランは「恐らく重要視すぎている。しかし、全く無視するのも適当ではない。」¹⁵⁾と批評している。

それまで父の意向によって志望を決めていたが、父亡きあと、カルヴァン自身が彼の生涯の方向を定めることになる。彼はパリに赴き、研究を再開する。フランソワ一世がパリに創設し、後に、今日のコレージュ・ド・フランスとなる王立研究所で、ピエール・ダネス Pierre Danès からギリシヤ古典文学を、また、フランソワ・ヴァターブル François Vatable からヘブル語を学ぶ。そして、1531年冬から1532年にかけて、彼の処女作、『セネカの「寛容論」注釈』¹⁶⁾の完成に力を注ぎ、1532年4月4日出版され、ユマニストとしての彼の名声を高めるのである。

Ⅱ. 『セネカの「寛容論」注釈』とカルヴァンのユマニズム

「カルヴァンの伝記作家たちは通常、この処女

作品に関して数ページを割くだけか、それとも、せいぜい、カルヴァンの将来の宗教的方向のしるしとしての意義を見出す位のものである。」¹⁷⁾とヴァンデルは『「寛容論」注釈』の意義が過少評価されていることを指摘し、例外として、ルクルトル¹⁸⁾、グリーン¹⁹⁾、バイエルハウス²⁰⁾などを挙げて高く評価し、ドゥーメルグはこの著作に関しては、新しい貢献を寄与していないと述べている。ヴァンデルはパニエの評言を援用して、『「寛容論」注釈』は真面目な学生の非常にすぐれた研究をはるかに上廻ったものである。²¹⁾と評価し、「この著作は彼の学識や文体によっても、また、ヴァラ、エラスムス、ビュデ派の人々が完成した方法論を実際に適用した注目に値する作品である。」²²⁾とこの『「寛容論」注釈』を高く評価し、その意義をかなり詳細に説明している。

ヴァンデルはカルヴァンが何故セネカの『寛容論』を選んだかを考察している。すなわち、セネカがネロ皇帝に対して、寛容の政治を願った如く、カルヴァンは『「寛容論」注釈』により、当時のプロテスタント教徒に対するフランソワ一世の寛容を願っているという推測が成り立つが、この注釈では、このようなことは一行も書かれていないと言う。外的な動機としては、エラスムスがセネカの著作を二度出版し、第2版は1529年に出しており、エラスムスはセネカの著作に余り満足していない。カルヴァンはエラスムスの気付かなかったあらゆる問題が、セネカのうちにあることを示そうとしたと述べている。それでは、内的な理由は何であろうか。ストア派の道徳はカルヴァンの同時代人、また、少し後世に属する人々にとって、選ばれた魂をもつ人々のみが近づきうる最高の教えであった。それに反して、イタリア・ルネッサンスは俗悪な徳と個人的幸福を強調し、享乐的、快楽的な傾向をもっていた。キリスト教的ユマニストはイタリア・ルネッサンスのこのよう

14) Cf. W., p. 10.

15) W., p. 11.

16) *Le Commentaire sur le De Clementia de SÉNÈQUE.*

17) W., p. 12.

18) H. LECOULTRE, *Calvin d'après son commentaire sur le De Clementia de SÉNÈQUE* (*Revue de Théologie et de Philosophie*, Lausanne, 1891, pp. 51—77).

19) BREEN, *op. cit.*, pp. 67—99.

20) BEYERHAUS, *op. cit.*, pp. 1—25.

21) PANNIER, *Evolution religieuse*, p. 23 ; W., p. 12.

22) W., p. 12.

な傾向よりも、禁欲的ストイシズムに価値を見出した。カルヴァンは『「寛容論」注釈』のなかで、ストイシズムとキリスト教の類似点を挙げ、超自然的摂理の存在を両者が一致して肯定している点を指摘する²³⁾。ヴァンデルはさらに、カルヴァンのユマニズムは方法において現われていると指摘している。古典文学、教父哲学に関するすばらしい知識が駆使されており、これはユマニストとしては当然のことであるが、カルヴァンの場合には、のちに聖書解釈にも、この方法が適用されるのである²⁴⁾。また、ヴァンデルは「全作品において、カルヴァンは明快な論理を用い、洗練された、快い文体で表現するよう、つねに心掛けている。カルヴァンが16世紀一流のラテン文学者であったことはよく知られており、同様に、フランス語で書くとき、その文章はパスカルやボシュエを思わせるような豊かさや気品の高さがある。彼の磨かれた趣味はエラスムスにも匹敵する」²⁵⁾と、パニエ²⁶⁾やブリーン²⁷⁾の研究に基いて指摘している。

Ⅲ. 回 心

「カルヴァンの回心は数え切れないほどの論争の種となったが、その論争は余り成果がない」²⁸⁾とヴァンデルは指摘し、この問題に関する最も入念な研究として、若干のものを挙げている²⁹⁾。1532年9月以来、カルヴァンが宗教改革の陣営に加わったという主張は、これまで久しくカルヴァンからブッツァーへの手紙³⁰⁾をその根拠としてき

たが、この手紙の日付は全く不正確で、いずれにしても1532年よりも以後であることが判明している。カルヴァンの残した資料には日付を明記していないが、やはり、幾つかの有用な指標がある。つまり、1557年に出版された『詩篇注解』の序文の1節である。「私は法王の迷信にひどくふけていたので、この深い泥沼からはい上ることは容易なことではなかった。それゆえ神は、年の割りには余りにもかたくなになっていた私の心を、まず突然の回心によって征服され、教化可能なものにならしめ給うた。そこで私は真の信仰についていささかの興味と知識をもつようになったので、この点についても進歩しようという熱意にもえられて、他の研究をなおざりにはしなかったが、前ほど熱心には行わなくなった。まだ1年もたたないうちに純粋な教義を欲するすべての人々が、この点では新米にすぎない私のところにやって来て学ぼうとした」³¹⁾この1節によれば、カルヴァンはローマ教会に強く結びついていたことを彼自身が述べている。そして、恐らくその頃、カルヴァンが入手したプロテスタントの文書を読むとか、オリヴェタンか、ヴォルマルのような人物がカルヴァンを宗教改革運動に誘おうとした試みとか、カルヴァンが彼らに対して抵抗したことを推測することができよう。ついで、回心が突然、起ったとカルヴァンは述べている。4半世紀後に書いたものであるから、カルヴァンが諸々の事情を単純化したとしても、ここで用いられている表現は、宗教改革に公然と参加し、ローマ教会と完全に決裂する以前に主な改革思想を知っていたと

23) Cf. W., pp. 13—14.

24) Cf. W., p. 15.

25) W., pp. 18—19.

26) Cf. W., p. 19; PANNIER, *Calvin écrivain*, Paris, 1930.

27) Cf. W., p. 19; BREEN, *op. cit.*, p. 150 s.

28) W., p. 20.

29) Cf. W., 20. H. LECOULTRE, *La Conversion de Calvin* (*Revue de Théologie et de Philosophie*, Lausanne, 1890); A. LANG, *Die Bekehrung Calvins*, Leipzig, 1897; MULLER, *Calvins Bekehrung* (*Nachrichten der Gesellsch. der Wissensch. zu Göttingen*, 1905); WALKER, *op. cit.*, pp. 78 ss.; P. WERNLE, *Zur Bekehrung Calvins* (*Zeitschr. für Kirchengeschichte*, 1906 et 1910); A. LANG, *Johannes Calvin*, pp. 14 ss.; DOUMERGUE, *op. cit.*, t. I, pp. 327 ss.; PANNIER, *Evolution religieuse*, passim; Imbart de LA TOUR, *op. cit.*, pp. 20 ss.

30) Cf. W., p. 20; *Opera omnia quae supersunt* (*Corpus Reformatorum*), Brunswick, 1863—1900. 以下、略号 *Opp.* で示す。

31) *Opp.*, 31, 22; cf. 倉塚平訳『原典宗教改革史』ヨルダン社, 1976年. pp. 361—362. 参照。以下、『原典』と略す。

か、温健な改革主義に同調していたことを否定するものではない。他方、宗教改革の同調者として、回心を語っている『サドレへの手紙』の一般に周知されている1節を引用しないわけにはいかないであろう。「わたしがおのれ自身をつまびらかに検討すればするほど、わたしの良心はより鋭いと感じて突き刺され、自己を忘却のかたへ連れ去る以外に、残っている緩和策は何もないことになりました。しかし、それよりも良い手段が提示されていなかったために、わたしはこれまでの道ととり続けました。ところが、非常にちがった教理が唱道されたとき、この新しい教理は、わたしたちをキリスト教的信仰告白から迷い出させるものではなくて、その源泉に連れもどし、いわば、その濁りを再び澄ませ、本来の純粋さを回復するものでありました。けれども、その新しさに反感をおぼえて、わたしは耳を傾けようとせず、最初は、告白いたしますが、熱心に、かつ勇気をふるって反対いたしました。人間には生来、自分の一たび着手した道すじを固執する頑迷、固陋がありますので、まことに、わたくしは、自己の全生涯が無知と誤謬との中にあったことを自認するように導かれるのを、嫌っておりまして。この新しい教師たちから、わたしを特に離させていたのは、一つのこと、すなわち教会への尊敬ということでありました。しかし、ついにわたしが耳を開き、教えられていることを受け入れるに及んで、わたしは、教会の権威を毀損するのではないかと、憂慮が、無用のものであったことを了解いたしました。」³²⁾

カルヴァン自身の証言の他に、彼の回心の日付をおおまかに決定させる指標がある。1533年8月23日、ノワイヨンのカトリック教会の会議に出席しており、他方、1534年5月、教会禄を辞退するためにノワイヨンに來ている。教会禄を受けることは、ローマ教会との決裂と相い容れないと判断したのである。それ故、カルヴァンの回心はこの二つの日付の間でなければならない。

ここで、ヴァンデルはニコラ・コップ Nicolas Cop の演説に言及して、カルヴァンの回心について考察を加えている。即ち、1533年には宗教改革の同調者は、国王やその側近が彼らの運動を支持しているものと思ひ込んでいた。ルーヴル宮殿では福音主義的な説教がマルグリット・ド・ナヴァール妃の要請でなされたりした。ところが、同じ1533年の万聖節(11月1日)、パリ大学の新総長、ニコラ・コップが就任演説し、その中で福音書の役割と信仰義認に関して、宗教改革者の考えを述べた。この演説は長い間、カルヴァンの作であると考えられていた。コップは、カルヴァンの最初のパリ滞在以来、親しい友人であったし、カルヴァン自身の手による原稿が発見され、また、この事件のあと、カルヴァンが変装して逃亡しているのは、この演説の原稿を書いた者である故と推定されてきた。ところで、今日では次のような点が明らかにされている。つまり、この演説の冒頭はエラスムスの作品から借用されたものであり、『マタイによる福音書』5章3節の解釈はルターが説教し、ブツァーがラテン語に翻訳したものを借りている³³⁾。演説の他の部分はカルヴァンのものというよりもむしろ、ルフェーブルの立場であり³⁴⁾さらに後年に行なった同じテキストの説教において、カルヴァンはこれとは非常に異なった解釈をし、コップの解釈とは明らかに反している³⁵⁾。カルヴァンの手稿であるという点については、ランクとミューラーが、今日、紛失してしまった原稿の写しでしかないことを立証している。だから、次の如き推論しか成り立たなくなる。すなわち、カルヴァンはコップの友人であり、その演説の原稿を書き写すほど、この演説に関心をいただいていた。コップと共に逃亡した件については、両者の友情が深いことは周知のことだったので、当然であるとしている³⁶⁾。

ヴァンデルは以上のことから、「カルヴァンは友人コップの演説に賛成していた」³⁷⁾であろうと結論し、「当時の人々に課せられていた宗教問題

32) *Opp.*, 5, 412. 渡辺信夫訳『キリスト教古典叢書Ⅷ.「カルヴァン篇」』(新教出版社)1959年, pp.99—100.

33) Cf. *W.*, p. 23.

34) Cf. *W.*, 23.

35) Cf. *W.*, p. 23.

36) Cf. *W.*, p. 23.

37) *W.*, p. 23.

を真剣に考察し、また、ローマ教会と深く結びつけていたきずなを打ち切っていることも推測できる³⁸⁾としている。コップの演説の内容からみて、エラスムスも加わりうるような、教会の穏健な改革の可能性を信じていたことを示唆している。このような状況の中で、カルヴァンの突然の回心、つまり、彼の心の中に起った根本的な変化は、教会祿を辞退するためにノワイヨンへ行った直前であるとするのが、大きな誤りを犯さないことになるであろうとしている³⁹⁾。そして、回心とユナニスムとの関係については、回心前はユナニスムは彼にとって人生の目的そのものであったが、回心後は方法となったと述べている⁴⁰⁾。

第2章 第1次から第2次ジュネーヴ時代

1534年5月、ノワイヨンへ赴き、教会祿辞退の手続きをとったのち、メッツからストラスブールへ行き、1535年にはバーゼルに滞在する。1536年2月、イタリアのフェラーラを訪れ、ついで、ストラスブールに向おうとするが、丁度、フランス王フランソワ一世とドイツ皇帝カール五世が戦争しており、アルザス経由でストラスブールに入る道は閉鎖されていた。そこでカルヴァンはリヨンに出て、そこからジュネーヴ経由のルートをとろうとした。こうしてジュネーヴに滞在していたとき、この町で宗教改革運動を始めていたギヨーム・ファレル Guillaume Farel から協力するよう熱心に頼まれる。ジュネーヴへの宗教改革の導入に関しては、ヴァンデルは若干の文献を挙げている⁴¹⁾。カルヴァンが第1次滞在を始めたときのジュネーヴの状況については、カルヴァン自身が死に旅出つ床で回想している。「私がはじめてこの教会に来たとき、ほとんど改革運動はすすんでい

ませんでした。説教はされていましたが、それだけでした。人々は偶像を探し出し、焼いておりましたが、宗教改革事業は全く行なわれておりませんでした。すべてが混乱状態にありました。』⁴²⁾

ヴァンデルはジュネーヴにおけるファレルの宗教改革の意義を次の如く指摘している。「しかしながら、ファレルによってそれまでになされてきた宗教改革事業を過少評価してはいけない。のちにカルヴァンの活動の特徴となるほとんどの点で、ファレルは先駆者であった。カルヴァンよりは恐らく適材ではなく、計画的ではなかったが、少くとも、第一歩を踏み出し、最初の段階を築き、そして、カルヴァンをこの事業に参加させた功績がある。彼自身はこの事業を完成することができなかったが、カルヴァンが輝かしくも、しかし困苦の末、成功に導いたのである。ファレルはカルヴァンに初めて会ったときから、カルヴァンが彼よりも優れ、彼が考察した計画を実現しうる人物であることを見抜いていた。』⁴³⁾

さて、カルヴァンはジュネーヴ教会の聖書講義の講師として、ジュネーヴの宗教改革者としての生涯を歩み出す。まもなく、説教者となり、教会の再建事業に着手し、4つの分野を担当している。すなわち、聖書解釈、教義、説教、教会の再建である。1537年1月に『ジュネーヴ教会教会規則』が成立し、その前年に出版された『キリスト教綱要』を要約して『カテキスム』を信仰教育のため編み、また、『カテキスム』の要約とも言うべき『ジュネーヴ教会信仰告白』が作成される。この宗教改革事業に対して、市会からの抵抗が強まり、やがて激突の時期がやってくる。

こうした状況の中でカロリ事件が起った。ローザンヌの説教師ピエール・カロリ Pierre Caroli がカルヴァンの『カテキスム』にも、『信仰告白』にも、「三位一体」という言葉がないから、異端

38) W., p. 38.

39) Cf. W., 24.

40) Cf. W., p. 25.

41) Cf. W., p. 29. ジュネーヴへの宗教改革導入に関しては、H. HEYER, *L'Eglise de Genève*, Genève, 1909; Ch. BORGEAUD, *L'Adoption de la Réforme par le peuple de Genève*, Genève 1923; H. NAEF, *Les Origines de la Réforme à Genève*, Genève, 1936. 1536年から1538年のカルヴァンの活動に関しては、A. RILLIET, *Notice sur le premier séjour de Calvin à Genève*; C.A. CORNELIUS, *Die Verbannung Calvins aus Genf im Jahr 1538*, Munich, 1886.

42) Cf. W., p. 29; Opp., 9, 891 s. 『原典』p. 386, 参照。

43) W., pp. 29—30.

であるとは非難した。三位一体という語を用いていないのは事実であったが、この言葉を用いる必要はなかった。しかし、カルヴァンはこの苦い経験にこりて、以後、三位一体の致義を非常に強調している。カロリは紛糾をまき散したあげく、1545年、ローマ教会へ再び改宗している⁴⁴⁾。

市会と宗教改革者たちとの関係が悪化している中で、古いカトリック時代のもを温存しているベルン市からベルン様式の聖餐式をするよう申し入れがあり、市会はそれを受け入れ、カルヴァン、ファレル、クローらは追放された⁴⁵⁾。ベルン市はジュネーヴにカトリックが復活するのを恐れ、カルヴァンたちとジュネーヴ市会の仲裁に入ろうとしたが、やがて改革派の新しい牧師がジュネーヴに招かれ、カトリックの手に陥ちる危険がなくなったので、この仲裁への試みは立ち消えとなった。

ジュネーヴから追放されたのち、カルヴァンはバーゼルに帰り、そこで研究生生活を再開することを強く望んだ。かつてファレルがカルヴァンにジュネーヴの宗教改革事業に参加することを強いたが、今度はブツァーが彼をストラスブールの宗教改革の戦いに参加させた。すでに1524年以来、宗教改革事業が押し進められていたストラスブールは、1538年当時には、ヨーロッパにおけるプロテスタントの一大中心地となっていた。神聖ローマ帝国内にあったけれども、ジャック・シュトルム Jacques Sturm の政治的手腕により、その経済的位置からは全く釣り合いのとれないほどの優

越さと重要さを獲得していた。この町の神学者たちは、特にブツァーとカピトは1536年の「ヴィッテンベルグの協定」のなかでルター派に忠実に加入していたけれども、独自の位置を占めていた。彼らの聖書解釈、研究、出版による活動はこの町だけでなく、ドイツの各地方にまで知れわたっており、特にブツァーは新しい教会の最良の指導者、第一級の組織者とみなされていた。市当局者と神学者は相い協力して、ストラスブールを学問の中心地とし、宗教改革運動の成果がユマニストたちの理想とも調和していた。カルヴァンがストラスブールに着いた時、新しい高等研究院を開こうとしていたのは、ユマニストの一人、ジャン・シュトルム Jean Sturm であった。ストラスブールの宗教改革およびカルヴァンのストラスブール滞在に関しては若干の興味ある文献を挙げている⁴⁶⁾。

ストラスブール時代、カルヴァンは猛烈な著作活動を行なう。『キリスト教綱要』は初版を全面的に改訂、増補し、第2版を出版する。また、『ロマ書註解』を出版し、『サドレへの返書』を書いている。また、会議に出席するため、しばしば旅行し、フィリップ・メランヒトンとも知り合い、その友情は長く続き、ドイツの教会事情にも通じた。また、ストラスブール滞在中に、カルヴァンはイドレット・ド・ビュウルと結婚している。多くの改革者たちは独身を尊しとする一種の迷信を打ち破るために結婚しているが、結婚のもつ意味を積極的に打ち樹てるまでには至っていなかつ

44) カロリ事件に関する最も包括的な研究は E. BAEHLER, *Petrus Caroli und Johann Calvin (Jahrh. für Schweizerische Geschichte, t. 29, 1904, pp. 41—169)* であるが、聖者伝的なカルヴァン伝を嫌った反動で、カロリに対して不当に好意的になりすぎていることをヴァンデルには指摘している。他に次のような文献を挙げている。DOUMERGUE, *op. cit.*, t. II, pp. 252—268; H. VUILLEUMIER, *Histoire de l'Eglise réformée du pays de Vaud, Lausanne, 1927. t. I, pp. 165—171*; E. CHOISY, *Farel à Genève avec Calvin (Guillaume Farel, pp. 354 ss.)*

45) Cf. W. p. 34. この事件に関しては、コルネリウス CORNÉLIUS の前掲書、52～60頁が詳細な分析をしているが、ショワジ CHOISY の示している (*op. cit.*, pp. 359 ss.) 如く若干の箇所を訂正しなければならないと、ヴァンデルは指摘している。

46) Cf. W., p. 36. ストラスブール滞在中に関しては、J. ADAM, *Evangelische Kirchengeschichte der Stadt Strassburg, Strassbourg, 1922*; J. W. RAUM, *Capito und Butzer, Elberfeld, 1860*; DOUMERGUE, *op. cit.*, t. II, pp. 318—356; G. ANBICH, *Martin Bucer, Strassbourg, 1914*; H. FELS, *Martin Bucer, New Haven, 1931*. カルヴァンがストラスブールに到着した当時の教会組織に関しては、F. WENDEL, *L'Eglise de Strassbourg, sa constitution et son organisation, Paris, 1942*. カルヴァンのストラスブール滞在中に関しては、E. STRICKER, *Johannes Calvin als erster Pfarrrer der reformierten Gemeinde zu Strassburg, Strassbourg, 1890*; J. PANNIER, *Calvin à Strassbourg, 1925*; J.-D. BENOIT, *Calvin à Strassbourg, et P. SCHERDING, Calvin der Mann der Kirche und die Bedeutung seines Strassburger Aufenthalts* (この二書は *Calvin à Strassbourg, Strassbourg, 1938*. に収められている。) DOUMERGUE, *op. cit.*, t. II, pp. 376—526.

た。カルヴァンは煩鎖な家事から解放され、主の御業によりよく仕えるために結婚した。結婚生活を神に捧げたのである。カルヴァンにおいて初めて、プロテスタンティズムの結婚観が成立した。

このようにカルヴァンがストラスブールにおいて宗教改革の事業をすすめる、また、彼の個人的生活がなされている間に、ジュネーヴでは大きな変化が起っていた。ファレルやカルヴァンに信奉する「ギエルマン」と呼ばれる群と新しい牧師たちとの争いがあったが、1540年8月、ファレルやカルヴァンの後継者たちはジュネーヴを去ることを余儀なくされ、ジュネーヴ教会に平和が戻る。カルヴァンはジュネーヴに再び招かれるが、「この十字架につくよりも、百回死んだ方がましです」⁴⁷⁾と答えて頑強に拒否した。カルヴァンは友人たちの激しい説得にあい、ついに、この復帰は神の意志である信じ、再び、ジュネーヴに行くことを決意し、9月2日、ストラスブールを出発した。

第3章 ジュネーヴ教会建設と正統性 のための戦い

ヴァンデルは、まず、第2次ジュネーヴ時代のもつ意味の重大さを次の如く指摘する。「カルヴァンがジュネーヴに復帰するのを承諾したのは、彼が第1次ジュネーヴ滞在時代に下書きし、その後、ストラスブール滞在の数年間に推稿して正確なものにした教会観を、具体的現実表現する可能性を見出したからであった。カルヴァンは頭の中で練った教会の理想を完全に実現させることもできなかったし、とりわけ、伝説が創り出した独裁者でもなかったにもかかわらず、彼がこの世を去るときあとに残したジュネーヴ教会はカルヴァンの事業と呼ぶことができよう。そして、それはジュネーヴ教会だけでなく、フランス、オランダ、北ドイツ、スコットランドのカルヴァン派の教会全部について言えるであろう。この分野においてカルヴァンほど広範で、永続的な影響を及ぼした人物は稀である。なぜならば、カルヴァンの神学思想が変化しているときでさえ、彼の教会観

の本質はつねに保持され、発展した。多分、現代のカルヴァン派の教会のうちに、彼のジュネーヴ教会の遺産を認めるには、幾分、困難さがある。しかし、それでもやはり、現代のカルヴァン派教会は『ジュネーヴ教会規則』においてカルヴァンがたてた根本原理を守っているのである。第2次ジュネーヴ滞在時代の24年間、カルヴァンが建設しようと努力したのは教会のみではない。彼はこの教会を生気づけ、教会が守らなければならない教理に一層の配慮をした。教理を展開させ、たえず新しい議論によって教理を支え、襲ってくるあらゆる汚染、攻撃からこの教理を守るために、カルヴァンは全力を尽して戦った。『キリスト教綱要』の各版や聖書注解となって表わされている彼の教理的著作は、彼の教会の事業と密接に結びついている。教理的作品は聖書の教えの真理を守るためのたえざる戦いの結果であった。カルヴァンの眼には神のみ言の完全さを守る、正統性のためこの戦いが、彼の著作、とりわけ、『キリスト教綱要』に多くの足跡を残していることは驚くに及ばない。この点を斟酌せずして、『キリスト教綱要』を正しく評価することはできない。ジュネーヴに到着したとき、カルヴァンは32才であった。彼は古典教育と神学教育をすでは十分受け、宗教改革事業に着手する準備ができていた。この事業を彼は神によって望まれているものと考え、全生活を捧げた。完全な伝記を書くことを目的としていないので、本書では彼の事業を直接動かし、その思想に重大な影響を与えた事件のみを取り扱う。」⁴⁸⁾

カルヴァンはジュネーヴに1541年9月13日に着いた。「あのフランス人」と呼ばれ、正確に名前を呼ばれなかったり、俸給もなかなか払って貰えなかった第1次滞在時代とは異なり、カルヴァンは厚遇で迎えられる。彼は教会に秩序を取り戻すために呼び戻されたのであり、また、それは彼がいただいていた使命であった。他の点は彼の眼には問題外であった。到着したその日、彼は市当局に赴き、教会と長老会に関する規則を練るため、牧師と長老からなる委員会を組織することを要求し

47) Cf. W., p. 43, *Opp.*, 11, 30.

48) W., pp. 45-46.

た。カルヴァンはこの規則の案を直ちに作成し、委員会と市当局にその採択を求めている。早くも、9月26日に準備の作業は終えた。その後暫く、休止状態が続く。市会がカルヴァン案に反対したからである。市会側はカルヴァンの方法で教会を組織することを希望したが、それは市当局の特権に触れたり、ジュネーヴ教会がベルン教会と共通して持っていて、政治的配慮で維持されている幾つかの慣例に触れない限りのことであった。それ故、彼が望み、またストラスブールで実施していたように、聖餐式を毎月行なうことはできず、3ヶ月毎にしかできなかった。牧師の任命問題に関しても、激しい論争がなされたが、最も重大な争いはカルヴァンが教会の規律を委ねようとした長老会に関してであった。原案では長老会は牧師とこの会によって任命された12人の長老から成っていた。この長老会は教理や道徳に対して罪を犯した教区民を召喚、譴責、破門する権利を持つことになっていた。そこで彼らの持つ教会裁判が日常生活の裁判と競うことになってくる。市当局はその点を承認することができなかった。市当局にとってはこのような教会裁判は当局の政治的特権を侵害していると考えた。市当局のこのような敵対的態度を十分理解するには、当時、世俗権力が今日よりもはるかに広い範囲で公共の道徳を統制する権力をもっていたことを想起しなければならない⁴⁹⁾。カルヴァンは市当局の裁判権にとって代ることを主張しているのではなく、教会の秩序を再建するために教会の裁判権を主張しているのである⁵⁰⁾。市当局は妥協の態度を見せ始めたが、破門を宣言する権利については拒否した。恐らく、破門が非宗教的問題にまで入り、長老会が世俗的問題の裁判に立ち入ることを懸念したのであろう。ところで、カルヴァンの眼には破門する権限は教会規律に関する彼の体系にとって本質的な部分であった。1537年にすでに主張していたが、ス

トラスブールでの経験、また、破門権を握ることを強く主張するブツァーとの接触により、彼の意見はさらに強化されていた。それ故、この点に関しては、あらゆる譲歩を拒んでいる。カルヴァンは打ち勝った。市当局の懸念を鎮めるために『教会規律』に新しい条項を書き加えることにより、少なくとも外見上は勝利を収めたのである。相反する主張を妥協させるための条項であるだけに、この後、約15年間、争いの原因となっている。その条項は次の如くである。「これらすべてのことは、以下のごとくなされるべきである。すなわち、聖パウロが定め給うごとく、教役者はいかなる世俗の裁判権も持たず、神の言葉の霊的剣のみを振うべきであり、長老会は市当局の権威や世俗の裁判所の権限に抵触してはならない。世俗権力はその権力を完全に保持し続ける。またなんらかの罰を行なったり、当事者を拘束する必要性が生じた場合、教役者は長老会とともに当事者の言い分を聞き、適切な忠告や訓戒をなし、全事件を小議会に付託すべきである。小議会は彼らの告発に基づいて事を解決する措置をとり、事の軽重に応じて判決を下す。」⁵¹⁾破門の権限は長老会にあるとカルヴァンは見なし、逆に市会に属すると市当局は解釈した。カルヴァンが決定的勝利を得るのは、14年後の、1555年のことである。このようにして、『教会規則』は1541年11月20日、市総会で可決された。彼の考えは不完全にしか表現されなかったにもかかわらず、やはり堅固な土台をなしている。修正を受け入れなければならなかったけれども、『教会規則』は教会に関する彼の考えを示していた。カルヴァンはこの規則が主によって示されたものであり、従って神の法であると見なしている。それ故、その原則は『教会規則』の序文で明瞭に表現されている。すなわち、「わが主がみ言葉によって示し定められたような霊的統治が、適切な形で要約され、われわれの間で確立し保持

49) Cf. W., p. 48 ケーラー W. KOEHLER, *Zürcher Ehegericht und Genfer Konsistorium*, t. II, pp. 541 ss. が多くの具体例を示している。

50) Cf. W., p. 48, J. BOHATEC, *Calvins Lehre von Staat und Kirche*, Breslau, 1937, pp. 539—563 ; J. COURVOISIER, *La Discipline ecclésiastique dans la Genève de Calvin (Hommage et reconnaissance à Karl Barth)*, Neuchâtel, 1946, pp. 19 ss) を挙げており、このうち、BOHATEC の著作はカルヴァンの見解を豊かに説明しているが、独善的であるとヴァンデルは批評している。

51) Cf. W., p. 49 ; *Opp.* 10 a, 30, n. 1 ; 『原典』「第4章、カルヴァンとジュネーヴ教会改革。3. 1541年11月20日に発布されたジュネーヴ教会の教会規則」参照。

されることが望ましく思われる。それゆえ、われわれはわが市や領地において、以下のごとき教会制度を制定確立し、守り保持することにした。われわれはこの制度がイエス・キリストの福音からとられてきたものであると見なしている。』⁵²⁾

この『教会規則』では、まず第1に、教会統治のために主が定め給うた4つの職制、牧師、教師、長老、執事を示す⁵³⁾。牧師は神のみ言葉を宣べ伝え、公私の生活において、教化し、訓戒し、勧告し、叱責し、聖礼典を執行し、長老ないしは委員とともに兄弟愛に満ちた処罰を行なうことを職務とする。召命なしにこの職務が行なわれることを防ぐため、牧師の採用試験、任命する権限、任職の儀式ないしは手続きが規定されている。次に、教師は「健全な教義で信徒を教育する」ことを職務とする。カルヴァンは教師が「学校の職務」全体を受け持つとし、子供の教育のため、学寮の建設の必要性を説いている。教師の採用に関しても規定している。また、長老は「各人の生活を監視し、過ちを犯したり乱れた生活を行なっていると思われるような者を温かく訓戒し、必要な場合にはそれを牧師会に報告する」のを職務とすると定められ、また、長老選出の方法が述べられている。最後に、執事は「困窮者のために富を受領、分配、保持するために委任された」者であり、また、「病人のことを想い、いたわり、困窮者に食物を施す者」であると規定されている。

「聖礼典、結婚、埋葬、病人訪問、囚人訪問は副次的に重要なものであるので、ここではとりあげない。逆に、子供に対する宗教教育に関する規定に言及するのは適当である」⁵⁴⁾とヴァンデルは述べて、カルヴァンが子供に対する宗教教育を重要視していることを示している。カルヴァンはカテキズム教育を重要な訓練と見なしていた。この点は牧師たちへの最後の訣別の言葉にも見られる。「ストラスブールから戻ってくると、私は大急ぎでカテキズムを作成しました。なぜならば、カテキズム教育と訓練を行なうことを誓約しない

牧師を受け入れたくなかったからです。』⁵⁵⁾『教会規則』では「全市民と住民は日曜日の正午、すでに述べたカテキズムにその子供たちを連れてくるか、送り出さなければならない」と、親の守すべき規則を示し、また、子供たちを「教育するために手引書を作らねばならない。そして、彼らに教えるだけでなく、何が教えられているかを質問し、それをよく理解し記憶しているかどうか調べなくてはならない」と、カテキズム教育の徹底を規定している。十分に教育された場合には「そこに含まれているものの要約を厳粛に暗誦し、教会に出席して自己のキリスト信仰告白としてこれをなすものとする」と定めている。このことがなされて初めて、聖餐式に参加することが許される。「カルヴァンは1542年のカテキズムにおいて、1534年のブツァーの『カテキズム』の内容、規定の配列の影響を受けているのと同様、『教会規則』の規定は1532年のストラスブールの『教会規則』の内容を正確に写しとっている。』⁵⁶⁾とヴァンデルは指摘している。

* * *

『ジュネーヴ教会教会規則』と『ジュネーヴ教会カテキズム』の作成という重大な問題を処理したのち、以後、カルヴァンはジュネーヴを彼の理想にできる限り近い市と教会にする事業に専念することができた。定例の説教によって多くの市民を徐々に福音に近づけていた。また、近隣地方やフランスから牧師を補充するため、ジュネーヴに神学講座を開設し、初めのあいだ、彼が殆んど1人でその講義を担当した。『教会規則』がその重要な意義をうたっている学校では、一般教養を教えることになっていた。カルヴァンはそれを教会の永続的な指導下におき、これを管理するためにストラスブール時代から知り合っていたセバスチャン・カステリオン Sébastien Castellion を迎えた。

このカステリオンがカルヴァンと対立するようになる。すなわち、1543年、カステリオンは説教

52) Cf. *W.*, pp. 49—50; *Opp.*, 10 a, 16, n. a.; Cf. 『原典』, p.414.

53) Cf. *Opp.*, 10 a, 15 ss.

54) *W.*, p. 52.

55) Cf. *W.*, p. 52; *Opp.*, 9, 894.

56) *W.*, p. 53.

師の職を要求した。規則により彼は試問を受けたが、そのとき、『雅歌』の正典性を認めず、また、『使徒信条』の中のキリストが「陰府にくだった」という条項も信じなかった。カルヴァンはカステリオンが牧師になることは反対したが、学校教師を続けることには何ら反対しなかった。カルヴァンは次のような和解を計る言葉さえ述べている。「彼（カステリオン）が牧師として就職すること認められなくとも、彼の人生における汚点ではないし、対立している点が信仰の主要な問題に関する不敬虔な教理でもない」⁵⁷⁾しかし、両者の対立は融解するには激しすぎた。カステリオンは聖書講義の最中、ジュネーヴの牧師たちが道徳よりも教義を重視していると強く非難したので、カルヴァンは直ちに市当局に訴えた。市当局はカステリオンを譴責し、翌年、彼はみずから市を去った⁵⁸⁾。

ジュネーヴ教会建設のための、カルヴァンの苦しい戦いは続いた。市会議員ピエール・アモー Pierre Ameaux は厳しい教会訓練に不満を持ち、カルヴァンを非難した。アモーは1546年4月8日、処罰された。さらに深刻なことには、ジュネーヴの最も重要な家柄とされているペラン家とファーヴル家が長老会と対立し、アミ・ペラン Ami Perrin はカルヴァンを激しく非難した。アミ・ペランはギエルマン党の頭首であり、ストラスブールへカルヴァンを迎えに行った人物であるが、以後、14年間に亘ってカルヴァンを苦しめる。1547年6月には、ジュネーヴの旧家、ジャック・グリュエ Jacques Gruet の家で潰神、不道徳を示す文書が発見された。1548年の選挙では、フラ

ンスとイタリヤからの亡命者の大多数によって支持されたカルヴァン派とペランの指導下にあるジュネーヴの旧家の人々が対立した。市会議員の選挙ではアンチ・カルヴァン派が勝利を収めた。一方、年毎にジュネーヴにやってくる亡命者の数は増加し、カルヴァンはその中に最良の協力者を得ることになる。ローザンヌのギリシャ語教授、テオドール・ド・ベーズ Théodore de Bèze、ローランド・ノルマンディ Laurant de Normandie、ギヨーム・ビュデ Guillaume Budé の子供たち、ギヨーム・ド・トリ Guillaume de Trie などがある。また逆に、ジュネーヴに新らたに入ってきた者の中からもカルヴァンを非難する者が現われる。最初の攻撃は元カルメル会修道士、ジェローム・ボルセック Jérôme Bolsec によってなされた。ボルセックは直ちに逮捕される。彼の処罰の決定にはアンチ・カルヴァン派の政治勢力がからんだりして、手間どるが、遂にジュネーヴより永久に追放される。このボルセックは1577年、この後、2世紀間、アンチ・カルヴィニストがカルヴァンを非難する資料の宝庫とした、中傷に満ちたカルヴァン伝を出版した⁵⁹⁾。

ジュネーヴのカルヴァンに反対する勢力はさらに増し、1553年の選挙では、アンチ・カルヴィニストが勝利を収め、アミ・ペランが筆頭理事となり、カルヴァンとその同僚を悩ます厄介な問題が続出した。このような危機的状況下で、カルヴァンがジュネーヴ滞在中に巻き込まれた事件のなかで、最も重大なセルヴェ事件が突然、起った。この事件に関しては、カルヴァンのすべての伝記が詳述している⁶⁰⁾。ミッシェル・セルヴェ Michel

57) W., p. 56 ; *Opp.*, 11, 676.

58) Cf. W., p. 55, cf. F. BUISSON, Sébastien Castellion, Paris, 1892 et DOUMERGUE, *op. cit.*, t. VI.

59) Cf. Richard STAUFFER, *L'humanité de Calvin*, Ed. Delachaux et Niestlé, 1964, 拙訳『人間カルヴァン』（すぐ書房）1976年, p. 10. 「そこではカルヴァンは野心家で、うぬばれで、傲慢で、残酷で、意地が悪く、執念深く、とりわけ無知として扱われている。その上さらに、けちで、金銭欲が強く、死者を生き返らせる振りまでしたほどの詐欺師で、贅沢な御馳走を好み、さらに悪いことには、恥ずべき不道徳のかどで、生れ故郷、ノワイヨンで焼印を押されるよう断罪されることになっていた放蕩者であり、また男色家として紹介されていた。このようなカルヴァン像を完成するためボルセックは、この宗教改革者を悪徳の罰のため、『からだじゅう虱と蚤でたべられ』うじ虫に侵されたのち、悪口雑言を口にし、呪い、冒瀆しながら、最も深い絶望の犠牲となって死ぬという、神から見放された者にしている。」

60) Cf. W., p. 64. ヴェンデルは主要なものとして次のものを挙げている。DOUMERGUE, *op. cit.*, t. VI ; N. WEISS, *Calvin, Servet, G. de Trie et le tribunal de Vienne* (*Bull. de la Soc. de l'Hist. du Protest. français*, 1908, t. LVII) 近年発表の論文としては、H. M. STUCKELBERGER, *Calvin und Servet* (*Zwingliana*, t. VI, 1934) ; A. HOLLARD, *Michel Servet et Jean Calvin* (*Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. VI, 1945) 前者はカルヴァンに好意的で、後者は強い敵意をもっているが、共に新しい問題は何ら提供していないと述べている。

Servet は 1511 年頃、イスパニヤのヴィラヌエヴァに生れたが、その後の経歴は殆んど知られていない。1531 年、突然、ストラスブルールやバーゼルに現われ、宗教改革者たちと激しい論争を行なった。同時に、彼は三位一体について 2 冊の著書をハゲナウで出版し、伝統的三位一体論を批判した。この 2 冊の著書、『三位一体の誤りについて』*De Trinitatis erroribus* と『三位一体問答』*Dialogi de Trinitate* は激しい抗議を受け、ストラスブルールの市当局より発売禁止とされた。それから、彼はパリへ行き、医学を勉強し、ついで、校正係としてリオンに暫く滞在した。1540 年には、ヴィエンヌで大司教の侍医をしている。医学史の中で彼の名を高めた血液循環の発見は、多分この時期であろう。医学、解剖学の研究期間中も神学研究を放棄することをしなかった。ネオ・プラトン派の書物を熱心に読み、暇を見つけてはキリスト教をその原初の形で復興することを目論んで、『キリスト教の復元』*Christianismi Restitutio* の題で大著を書いた。セルヴェによれば、キリスト教教義は古代教父たち、次にローマ教会、最後に宗教改革者たちによって、次々と変造されてきた。セルヴェは原罪を認めず、現在ある罪の存在しか認めない。また、その罪も 20 才以上の者にしか現われまいだろうという。勿論、三位一体に関する独特の思想がこの書物の中に扱われている。この原稿をヴィエンヌの印刷屋に委ねることは危険だったのであろう。そこで、セルヴェはリオンの印刷屋へ持ってきた。その印刷屋はプロテスタントだったので、この客の思想が風変わりなのに警戒して、カルヴァンに判定して貰うよう、すすめた。そこでセルヴェは原稿の一部をジュネーヴに送った。カルヴァンは誤りを指摘、反駁し、さらに彼の著書、『キリスト教綱要』をセルヴェに送った。自らの思想の正しさを確信しているセルヴェは激しく反論し、また、『綱要』を評注でうめてカルヴァンに送り返した。

このようにして数年経ち、決定的な事件が起ることになる。1553 年、セルヴェは彼の書物をヴィエンヌでひそかに印刷することに成功した。セルヴェは偽名を使っていたが、ヴィエンヌで『キリスト教の復元』の著者であると認定され、訴訟期間中に逃亡した。セルヴェに逃げられたヴィエン

ヌでは、彼を火刑の判決に宣告したが、彼の著書と肖像画を広場で焚くだけで甘んじなければならなかった。セルヴェはナポリへ逃げて行く積りだったが、イタリアへ行くために、ジュネーヴを経由するという愚かな過ちを犯した。1553 年 8 月 13 日、彼が到着するや否や、カルヴァンの要請で逮捕された。ジュネーヴの法律では、告発人も被告と同じく監獄に入らなければならなかった。しかしながら、カルヴァンは何らちゅうちょすることなく、弟子の 1 人にセルヴェを異端と冒瀆のかどで告発させ、身代りの弟子が監獄に入った。市当局は直ちにセルヴェ告発を認め、カルヴァンの弟子は数日で釈放された。その上、最初の訊問でセルヴェは傲慢な態度を見せ、裁判官に非常に悪い印象を与えた。市会は自身の名においてこの訴訟を進めて行くことを決定した。ボルセック事件の場合と同様、近隣プロテスタント諸都市の意見が求められた。しかし返事が戻ってくる前にすでに、起訴状が作成されていた。これを作成したのはカルヴァンの反対党の人々であった。カルヴァンの与党も野党も共にセルヴェを追及している。その間、ヴィエンヌの宗教裁判所が異端者セルヴェの引き渡しを要求してきたが、市会はジュネーヴに裁判能力があり、異端者を理想的に処刑する能力があることを世に示すため、断固として拒否した。セルヴェは彼を取りまく状況の重大さを認識していなかった。恐らく、少くとも反対党の中で支持者があると思ったのであろう。実際、反対党の中には、セルヴェの拘束を緩和するために介入した者もいたが、極く少数であった。カルヴァンはセルヴェを死刑に処することを望んだが、火刑ではなく、瀆神の場合とられる通常の処刑を望んでいた。9 月 22 日、セルヴェは逆にカルヴァンを明白な異端者であると訴え、ジュネーヴから追放し、彼の財産を自分に引き渡すよう要求した。この向う見ずな態度は当然、セルヴェを一層不利にした。バーゼル、ベルン、シャフハウゼ、チューリッヒから返書が届いた時、世論はすでに異端者セルヴェの処刑が必要であることを確信していた。スイス諸教会は一致して、セルヴェ処刑に賛成し、ジュネーヴの人々の熱心と異端者が市を損うことから守った市当局を称賛した。信念からというよりも、カルヴァンを困らすため、アミ・ペ

ランは最終段階になって判決を下す前に 200 人議会に計ることを要求したが、無視された。カルヴァンや牧師たちは野蛮でない死刑方法を望んだが、10月26日、火刑が宣告された。

この死刑執行以来、カルヴァンも大きな責任を担っているセルヴェの処刑に関しては、多数の文献が出版されてきた。カルヴァンに対して最も好意的な歴史家でさえ、その大多数は、この軽卒な行為によりカルヴァン自身と宗教改革の名声を一挙に曇らせたと厳しく非難してきた。しかし、それは次の 2 点を忘れてしている。第 1 は、セルヴェの以前にも多くの異端者やアナバプテストたちがプロテスタント教会からもカトリック教会からも、同じ刑罰を受けていたという点であり、第 2 に、今日の判断の仕方や道徳的規準を過去に適用するというのは歴史に関する健全な考えに反するという点である。身体を殺す者を殺人者として罰する如く、魂を殺す冒瀆者を死刑にするのはキリスト教国の市当局がしなければならない義務であると、カルヴァンも他のすべての宗教改革者も確信していた⁶¹⁾。メランヒトンも同じ意見を 1554 年 10 月 14 日付の手紙でカルヴァンに述べている。「あなたがセルヴェといういまわしい冒瀆者を反駁したのを読みました。私はあなたの戦いの審判者である神の御子に感謝します。また、あなたに対して、教会は現在も将来も感謝するでしょう。私はあなたの判断に全く賛成です。正規の裁判の後、あの冒瀆者を死刑にすることによって、あなたの市当局が正しく処理したと私は確信しています。」⁶²⁾セルヴェが告発されたのは、ボルセックが表明したような単なる異端的思想ではない。三位一体を否定し、従って、当時の通念によれば真の冒瀆を犯したからである。その上カルヴァンがこの事件で妥協しなかったのには、重要な理由がある。セルヴェの問題は彼の神学と信仰の土台そのもの、つまり、キリストの神性をくつがえそうとしたものだったからである。カロリとの論争でカルヴァンは三位一体論には非常に敏感になっていた。また、セバスチャン・カステリオンがセルヴェの死後、数ヶ月経て、信仰のために暴力を用いたこと

に反対して、証言集を出版した時、当時殆んど反響が得られなかった。カステリオンは当時の人々にとっては重要でない問題を、しかも一面的にしか捉えていなかった。その上、カルヴァンはカステリオンの攻撃の大部分を前以って答えていた。『三位一体論に関する正統的信仰の擁護』*Défense de la foi orthodoxe concernant la sainte Trinité* において、セルヴェ事件における彼の態度を弁明するだけでなく、世俗の剣によって異端を抑圧する原理を示している⁶³⁾。寛容は 16 世紀においては、反対とか宗教的生ぬるさを立証することではありえなかったのである。ヴァンデルは以上の如く、諸研究を検討しつつ、セルヴェ事件を論及している。

カルヴァンはこの苦い事件において市当局が十分支持してくれていることを見出した。さらに、訴訟の執行を手中に握っていたのは政治権力であり、改革者カルヴァンは専門的な助言をするにすぎなかった。神学者としてのカルヴァンの権威は重味を増し、近隣プロテスタント諸都市の証言により、彼は真の信仰の公認された擁護者となった。しかし、長老会による規律やその権限の問題に関して、市当局との争いにカルヴァンが勝利を収めたと結論するのは早計である。破門の合法性については、セルヴェの訴訟が進行中の時ですら、疑念をもって見られていた。ところで、これまで得たすべての成果を一挙に無にしてしまう、これまでのものよりはるかに重大な新しい攻撃を受ける。1 年前に、長老会はアンチ・カルヴァン派の煽動者、ベルトリエ Berthelier を破門した。1553 年 9 月 1 日、ベルトリエは聖餐式に出席する許可を長老会にだけでなく、市会にも求めた。これは破門を宣告したり、取り消す権限が市当局に属することを意味させようとするものであった。この請求はカルヴァンの抗議にもかかわらず受け入れられた。カルヴァンは長老会によって破門された人々には聖餐式を受けさせることはできないと宣言した。彼は午後の説教でこれが最後となるかもしれないと述べ、もしもベルトリエが聖餐式に出席したら、ジュネーヴを去ることも決意して

61) Cf. *W.*, p. 67.

62) *W.*, p. 67; *Opp.*, 15, 268.

63) Cf. *W.*, p. 68; *Opp.*, 8, 457—644.

いた。結局、この時は何も起らなかった。というのは、ベルトリエは市当局自身の願いを入れて、聖餐式には出席しなかったからである。紛争はその後も続き、やっと1554年の選挙でカルヴァンの支持者が最高委員4人のうち3人を占め、翌年には市会で絶対多数を占めた。しかし、破門の問題は未だ解決をみない。やっと1555年1月になって市議会で討議され、採択されている。

その後、カルヴァンはジュネーヴにおける事業の冠とも言うことのできる、アカデミーの創設に努力を集中した。カルヴァンのこの事業に関する最も完全な著作として、ヴァンデルはボルゴー著『カルヴァンのアカデミー』⁶⁴⁾を挙げている。ユマニストと宗教改革者は多くの点で相反するが、古典に基いて可能な限り教育を行なう点では一致していた。ルター、メランヒトン、ツィングリー、ブツァー、カルヴァンは皆、古典教育による価値を認め、そこから神学諸学科の徹底した研究に至るべきだとする。他の多くの仕事があるにもかかわらず、大きな熱意をもってアカデミーの創設に当った。ローザンヌから追放されたテオドール・ド・ペーズらのジュネーヴ到着はカルヴァンの努力を助けた。1559年6月5日。カルヴァンは新しいアカデミーの開学式を司式した。ここに、初等教育から高等教育、神学教育の組織が成立する。このジュネーヴのアカデミーは、17世紀フラ

ンスに設立されたプロテスタントのアカデミーや、さらにまた、イエスズ会の設立した学校にも影響を与えたとヴァンデルは指摘している⁶⁵⁾。

ヴァンデルはカルヴァンのジュネーヴにおける宗教改革事業を高く評価して次の如く述べている。「カルヴァンはジュネーヴに見かけはつましい事業、つまり、彼が創設した教会と学校、彼が完全に造り変えた市を残した。しかし、実際、彼の事業は全ヨーロッパに、イギリス、スコットランドにまで発展して行った。しかし、常に彼の念頭から離れなかったのは、ジュネーヴでもなく、遠くの国にある教会でもなく、それはフランスであった。彼がフランスを離れたのは、外から福音を伝え、新しい教会を組織するためであった。青年時代に夢みたこの目的を達成するため、彼は全生涯をかけた。彼は改革派諸教会を同一の教理、同一の規律によって、一束の一貫し、統一した教会にまとめることに成功した。しかし、あの宗教戦争の恐るべき危機の時代に、つまり、改革派諸教会がカルヴァンを最も必要としていた時期に、助言を与え、指導するには彼は余りにも早くこの世を去って行った。」⁶⁶⁾

以上の如く、ヴァンデルは多くの資料と過去の研究成果を吟味しつつ、カルヴァンが主の栄光を顕わすために、宗教改革事業において如何によく戦ったかを示そうとしているのである。

64) Cf. W., p. 73; Ch. BORGEAUD, *L'Académie de Calvin*, Genève, 1900.

65) Cf. W., p. 74.

66) W., p. 75. ジュネーヴ以外の改革派教会に対するカルヴァンの活動に関しては、カルヴァンの活動を概括的に扱っている本書では取り上げていないが、ヴァンデルはフランスの教会に対するカルヴァンの活動については Imbart de LA TOUR を参照するようすすめている。